

## 細胞診検体の染色コントロールの検討 第1報

◎吉田 美帆<sup>1)</sup>、塚本 龍子<sup>1)</sup>、中西 大地<sup>1)</sup>、須广 佑介<sup>1)</sup>、猪原 千愛<sup>1)</sup>、猪原 哲嗣<sup>1)</sup>、今川 奈央子<sup>1)</sup>、伊藤 智雄<sup>2)</sup>  
国立大学法人 神戸大学医学部附属病院<sup>1)</sup>、国立大学法人 神戸大学医学部附属病院 病理診断科<sup>2)</sup>

【はじめに】特殊染色および免疫染色実施時にコントロールを使用することは、染色性の質の担保に重要であるが、細胞診においてコントロール検体を準備することは容易ではない。また、細胞診検体の場合、標本作製方法の工夫や保存方法、染色結果判定の際にも注意が必要である。今回、我々は液状細胞診検体用の固定液である Liqui-

PREP<sup>®</sup> (LGM) を用いて、グロコット染色と免疫染色 (TTF-1、WT1、Thrombomoduline) のコントロール検体を作製し使用可能か検討したので報告する。【対象と方法】

①細胞診の残余検体や手術時の未固定検体からコントロール用検体を収集した。残余検体は、沈渣に対して Liqui-PREP<sup>®</sup> の1次固定液を5ml 追加し、よく混和後30分静置、その後再度遠心し、上清を捨て、沈渣に2次固定液 (cell base) を5~10滴入れ混和した。手術時の未固定検体から穿刺吸引した針先を Liqui-PREP<sup>®</sup> の1次固定液を5ml の中で洗浄し、その後は残余検体と同様の手順で作製した。

②2次固定液を滴下した検体を、染色したい症例の塗抹面の上部に1滴滴下しスポイトで塗り拡げて自然乾燥させた。

③自然乾燥後、95%アルコールで10分固定し、染色を実施した。【結果】グロコット染色は、良好な染色性であった。免疫染色では、いずれも良好な染色性が得られた。しかし、グロコット染色用に使用した尿のカンジダ感染症例の検体は、時間経過とともに細菌の繁殖を認めた。また、同一スライド上に貼り付けた一部の症例で、コントロール検体が剥がれ、コンタミネーションを認めた。【考察と結語】細胞診のコントロール検体は、液状細胞診検体用固定液を用いることで使用可能であった。しかし、十分量の検体の確保と染色性の維持管理には課題が残る。また、固定条件の違いにより、染色性が異なる可能性があるため、捺印細胞診実施時や残余検体が多い際には、沈渣を各種液状細胞診検体用固定液に保存したり、塗抹標本を複数枚作製し、パニコロウ染色後、細胞転写用検体として保管したりしておくなどの対策も必要と考える。今後、染色性の保持期間ならびに他種の方法も検討していきたい。

(連絡先) 078-382-6474